

ミツバチからの贈りもの

木村 公之・岡田 照代・瓜生 恒子・鳥越 俊彦・鳥越 悠紀子・能勢 公紀・関本 秀一
(NPO法人 人と自然の会 みつばち研究会)

私たちはミツバチにいろいろお世話になっています。数えてみれば8ツもあります。^(註)今回はそのうち、ミツ(蜜)、ロウ(蠟)、ドク(ハチ毒)の3ツの一部を、日頃の活動で親しまれているものから展示しています。

ミツ(蜜)

「MUSEUM HONEY」は、私達が養蜂家のマネゴトの中で生態を観察しながら採蜜した百花蜜で、恒例のひとつはくフェスティバルで希望者に頒布しているものです。ニホンミツバチの蜜は、博物館に巣の駆除を依頼され、実行したときの副産物です。キナコ飴は、キナコを蜜で固めた素朴な昔菓子の一つです。

ロウ(蠟)

キャンドルは、ハチロウだけでつくられており、和ロウソクと芯の構造が違います。ハンドクリームは、ハチロウとオリーブ油で作られており、純粋な肌触り、リッチです。暖簾は、ハチロウを使ったローケツ染め(大和藍)ですが、パラフィン系との違いはいかがでしょうか？

ドク(ハチ毒)

ハチ毒入りクリームは、ニュージーランドをはじめとして世界で市販されており、筋肉痛、リュウマチに効果があるとされています。日本では、ハチ毒治療として、生きた蜂(雌ハチ)を患部に刺させる療法が、民間で支持されているようです。

ミツバチと人との付き合いは、エジプトのピラミッド時代の滋養食、手術時の消毒用としての蜜、あるいは日本の奈良時代、大仏鑄造時の剥離剤としてのミツロウからはじまり、現代ではローヤルゼリー、プロポリスから高級果物の受粉媒虫として、私たちの生活に活かされています。本物の素晴らしさに気づき、感動する心を育てたいものです。

^(註) ①ハチミツ、②ローヤルゼリー、③プロポリス、④花粉、⑤虫媒、⑥ミツロウ、⑦ハチ毒、⑧蜂の子